

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成29年10月11日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 農学研究科

職 名 教授

氏 名 富 永 達

助成の種類	平成29年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 国際会議開催助成			
国際会議名	第26回アジア・太平洋雑草科学会議			
開催期間	平成29年9月19日 ～ 平成29年9月22日			
開催場所	京都リサーチパーク(京都市下京区)			
参加者	総数 440名	内訳 日本:116名、中国:56名、韓国:31名、インド:30名、 オーストラリア:19名、マレーシア:15名、タイ:12名、 インドネシア:9名、アメリカ:8名、その他		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	事業に要した経費総額	10,307,949 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	関西・大阪21世紀協会、400,000円(予定)		
	経費の内訳と助成金の使途について			
		費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
		会場費	3,497,040	1,000,000
		機器・備品など使用料	955,270	0
		印刷費	1,570,830	0
		招待講演者旅費補助	1,090,000	0
	学生対象旅費補助、ベスト賞	230,000	0	
	飲食費関連	2,741,310	0	
	警備費	102,643	0	
	その他	120,856	0	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 第26回アジア・太平洋雑草科学会議(The 26th Asian-Pacific Weed Science Society Conference)の開催にあたりまして、助成いただきましたことを深く感謝申し上げます。本助成は、財団の定める使用範囲内であれば、費用の一部に充てることや他の資金と組み合わせての使用が認められていることから、全体の支出計画を策定するうえで大変有益で、会場費の一部に全額充当させていただきました。			

成果の概要／富永 達（農学研究科）

第 26 回アジア・太平洋雑草科学会議（The 26th Asian-Pacific Weed Science Society Conference, APWSS）を開催するにあたりまして、京都大学教育研究振興財団様からご支援を頂戴しましたことに厚くお礼申し上げます。有難うございました。お陰様で、盛会のうちに終了することができました。

アジア・太平洋雑草科学会議は、2年ごとにアジア・太平洋地域で開催される雑草科学に関わる国際学会で、国際雑草学会（International Weed Science Society, IWSS）の主要構成メンバーです。

雑草は、農作物の生産の場において病害虫と並び大きな負の影響を与える生物的要因で、近年は、外来雑草の侵入による在来自然生態系への影響も無視できない大きな課題となっています。これらの問題は、アジア・太平洋地域に限らず、世界的な問題ですが、農作物の生産や自然生態系の特性は、地域ごとに異なる側面ももっています。アジア・太平洋地域は、農業面ではとくに水田稲作を中心とする地域で、欧米の農業体系とは異なった特性をもち、雑草にかかわる諸課題について、アジア・太平洋地域の雑草に関する研究、教育、普及活動に携わっている者が一堂に会し、議論することは極めて重要です。日本は、とくに水田雑草に関わる諸課題について、世界をリードする立場にあり、本会議を日本で開催する意義は極めて大きいといえます。



今回の第 26 回アジア・太平洋雑草科学会議は、「人と農と自然のための雑草科学」をメインテーマに掲げ、2017 年（平成 29 年）9 月 19 日～22 日に京都リサーチパーク（京都市下京区）において開催し、招待講演、一般研究発表（口頭発表・ポスター発表）を行いました。アジア・太平洋雑草学会が、本年ちょうど創立 50 年を迎えましたことから、50 周年記念講演（Golden Jubilee Memorial Lectures）も併せて開催しました。このような記念すべき大会を京都で開催でき、お世話できましたことを光栄に思っています。本会議には、国内参加者 116 名を含む 25 か国の 440 名（うち学生 78 名）が参加しました。

会期初日には、とくに若手研究者をターゲットとした Technical Writing Workshop を開催し、約 70 名の参加者が熱心に受講しました。夕方には、Welcome Reception を催し、旧交を温めたり、初参加の若い研究者を互いに紹介する場面があちこちで見られました。

次の世代を担う学生さんを支援する目的で、国際雑草学会から 3 名分、アジア・太平洋雑草学会から 5 名分、日本雑草学会から 14 名分の旅費の一部が補助されました。国際雑草学会とアジア・

太平洋雑草学会から補助を受けた学生さんには、9月21日の大会ディナー中に、それぞれの会長からの授与のセレモニーがありました。また、学生さん対象のベスト口頭発表賞とベストポスター発表賞各2件も設けられました。

本会議の特徴の一つは、基礎的な研究を行っている研究者と応用的・実用的な研究を行っている研究者、普及活動を行っている技術者が一堂に会して議論することで、それぞれの知見や情報を互いにフィードバックすることができます。また、参加者の所属も大学、国や地域の研究機関、除草剤メーカーなど多様です。会期中は、招待講演と50周年記念講演のあと、各国の雑草問題 (Weed Problem, Constraint, and Opportunity in Different Countries)、総合的雑草防除 (Integrated Weed Management)、除草剤 (Herbicide)、非化学的防除 (Non-Chemical Control)、生物的防除 (Biological Control)、侵略的外来雑草 (Invasive Alien Weeds)、寄生雑草 (Parasite Weeds)、水生雑草 (Aquatic Weeds)、雑草生物学・生態学 (Weed Biology and Ecology)、アレロパシー (Allelopathy)、除草剤抵抗性雑草 (Herbicide Resistant Weeds)、除草剤耐性作物 (Herbicide Tolerant Crops)、雑草イネ (Weedy Rice) などのセッションに分かれ、口頭発表145題とポスター発表167題を通して最新の研究成果が披露されました。さまざまな研究発表のなかで、農業生態系や在来生態系に与える外来雑草の負の影響、除草剤抵抗性雑草の出現、とりわけ、除草剤耐性作物畑における当該除草剤に対する雑草の抵抗性の進化、雑草イネに関する課題は各国共通で、基礎的な研究から具体的な防除方法に関する発表まで幅広い議論がなされました。除草剤だけに頼らない雑草防除手段の「多様性」の必要性の議論もあれば、RNA 干渉を用いた新たな雑草防除技術の開発の議論もありました。



本会議でも、分子生物学的手法を用いた多くの研究発表がありました。研究手法としての分子生物学的アプローチがスタンダードになる中で、この研究手法について地域間格差が拡大し、この面での国際的な相互協力関係の構築の必要性を改めて感じました。

日本は、水田雑草の研究や防除技術で世界をリードしています。日本の研究成果を世界に還元していくことは極めて価値のあることです。水田稲作体系が国や地域ごとに異なるとはいえ、本会議での日本の研究者による発表には、海外の研究者も深い興味を示していました。同時に、海外の研究発表も、日本の研究者にとりましては極めて意義深いものでした。

大会最終日の9月22日には、会長挨拶の後、次期開催国 (マレーシア・クチン) の代表者の挨拶

拶、さらに、次期の国際雑草学会開催（タイ・チェンマイ）の紹介がありました。雑草科学の重要な国際会議が連続してアジアで開催されることとなります。その後、学生さんを対象としたベスト口頭発表賞とベストポスター発表賞の表彰式がありました。多くの候補者の中から選ばれた受賞者の発表は、将来の展開が大いに期待される内容でした。

お陰様で盛会のうちに大会を終了することができました。参加者からは、円滑な会議運営に対する称賛や様々な配慮に対する感謝のお言葉をいただきました。ともするとプログラム通りに進まないケースが多い中で、日本式の時間に正確な運営にもお褒めの言葉をいただきました。また、西陣織をはじめ、京都の伝統的な技術や歴史的な文化遺産に特別の興味をもたれた参加者が多く、大会の前後に京都の文化を十分に楽しまれたようです。当研究室にも参加者が訪ねてくれました。

貴財団からのご支援は、会場費の一部に全額充てさせていただきました。最後になりましたが、改めて貴財団からのご支援に心から感謝申し上げます。有難うございました。